

事業完了報告書

調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ~ 令和8年3月15日
調査研究事項	以下のⅠ～Ⅴのいずれであるかを記載した上で、研究テーマを明記する。 Ⅰ. 教育課程、教育環境整備に関すること
調査研究のねらい	Ⅰ、教育課程、教育環境整備に関すること <東大阪市立意岐部中学校> ③中学校教育を実施するに必要な日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方 <p>2024年度は外国籍の生徒が急増し、全生徒のうちの90%以上を占めるようになった。体験入学の生徒も含めると、年間を通じて生徒が増加している状況である。来日時期や日本語の理解度、母国での学習経験もそれぞれ異なる中で、どのように生徒のニーズを把握し、そのニーズにこたえることができるのか、また教材や授業の内容を工夫改善していくのかについて、さらに研究を深めていかなければならない。</p> <p>日本語指導においては、日本での生活者として安心、安全に暮らすことができるよう、生活に必要な日本語を中心に指導することで、中学校教育に必要な日本語の習得もめざす。2024年度は、日本語指導の教材作成について教員研修を行った。1時間の中に学習した文法事項を使って会話練習をする場面を設定するなど、語彙や文法だけでなく、それをいかに会話の練習に盛り込んでいくかを学んだ。2025年度は、渡日間もない生徒が増えていく中で、日本での生活に早く慣れるためにどのようなことを初期日本語として学習していくのが良いのか、研究を進める。また、教材作成を工夫しながら、日本語指導に係る担当者全員が、教材をどう効果的に活用して授業をすすめるか、実践と研修を積み重ねていく。</p> <p>1年間の学習の集大成として、生徒が自己の人生経験をふりかえりながら文集「おとなの中学生」を書く。自らのルーツに向き合い、現在の自分を振り返り、未来の自分を想像し、思いを綴り、仲間とともに共有する。普段の授業から母語で安心して話ができる環境を確保しながら、自分のことや自分の考えを伝え合う活動を通して、お互いのことを理解し、尊重する姿勢につなげたい。</p> <p>また、10代の外国籍の生徒（主に中国、ネパール）は高等学校に進学を希望する生徒が多く、それらの生徒の進路保障についても研究を深めていく。</p>

④ICT を活用した生徒の学習活動の支援の在り方

生徒の言語が多様化していく中で、タブレット端末を利用した学習理解は不可欠である。とりわけ生徒の母語（ネパール語）を理解する教職員がいないことから、授業を理解するうえで翻訳機能活用に取り組みたい。その他、高等学校入学を希望している生徒には補習授業を行っているが、タブレット端末を利用したAIドリル等を利用した家庭学習をさらに進めていきたい。

以上の2点以外にも、中学校区で、夜間中学の存在意義を広めていくため、中学校区の教職員の研修にこれからも参加する。また中学校区の祭りである「意岐部フィエスタ」での生徒のプレゼンテーションや、布施夜間との合同の行事を継続し、生徒同士、教職員同士が共に学びを深めていきたい。

また、社会福祉協議会との連携をさらに深め、福祉の支援が必要な生徒がいた場合にスムーズに協力体制を得られるよう、日ごろから関係を構築していきたい。

<東大阪市立布施中学校>

①中学校教育を実施するために必要な、高齢者向けの教育課程の在り方

本校には60歳以上の高齢の生徒が、16名在籍している。戦争や差別、貧困など様々な理由で学齢期に義務教育を十分に受けることができなかった生徒たちである。長年日本で生活をしているものの、文字の読み書きが定着していない生徒が少なくない。高齢層の生徒の多くは、ほとんど休むことなく毎日意欲的に登校している。毎年作成する文集「おとなの中学生」の中で「学校は私の生きがい」「生きている限り学び続ける」と語る生徒の想いに寄り添い、教科横断的な学びを推進する。

昨年度の一年間の振り返りアンケートの「日本での生活で不安や困っていることは減りましたか」の質問に対し、高齢の生徒の60%が否定的な回答（前年度は62.5%が否定的）であった。病院や役所での手続き、近隣の方とのコミュニケーション等での不安感があることは把握しながら、生徒に寄り添って生活上の困り感を引き出せていなかったことは大きな課題である。一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつけるという教育目標、また社会の中で自信をもってより豊かに生きるための学びの場を創造したい。

【個別最適な学びと協働的な学びの推進】

昨年度に続き、今年度も同様のテーマでさらに研究を進めたい。前述のアンケート「授業でタブレットを使うと学びやすいですか」の質問項目では、肯定的な意見が前年度の90.9%から63.7%に下降した。肯定的な感想は持ちつつも、長時間タブレットに向き合うことが目や体の疲労につながるという感想もあった。こういった実態を受けて、短時間でより効果的なタブレット学習やAIドリルの活用を創造する。漢字の学習、数学の式の立て方や図形の学習、英語のアルファベットの習得や簡単な挨拶の学習など効果的にタブレットを活用する。また、学んだ文字で自らの生い立ちを綴りその想いを聴き合うことで自己を見つめ直し、お互いに高め合う対話的な学びの場、社会の中でより豊かに生きるための学びの場を作りたい。クラスでの少人数での意見交流から、自信をもってより広く自分の意見を発信する経験を重ね、自尊感情の高揚につなげたい。2025年度は、12月に全国夜間中学校研究大会が東大阪市で行われる。その場で、これまで夜間中学校で学んできた成果や想いなどについて胸を張って伝えられるように取り組みを進める。

【文集「おとなの中学生」作成に向けて】

一年間の学びのまとめとして、自らの人生経験の中での想いや、自分にとって夜間中学で学ぶ意義などを「おとなの中学生」に綴る。昼間部や学校区の小学校などの学齢の児童生徒との交流や、その他外部団体との交流等も含めた出会い、また芸術鑑賞で豊かな表現と出会う機会を作りたい。そこから学んだ文字や表現で自らの生い立ちや想いを綴り、その想いを聴き合うことで自己を見つめ高め合う対話的な学びの中で、自信をもって自分の想いを綴ることができる態度を育みたい。

調査研究の成果

【意岐部中学校】

I. 教育課程、教育環境整備に関すること

③中学校教育を実施するに必要な日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方

今年度はさらに外国籍の生徒が増加し、全体の96%になった。特にネパールからの生徒の割合は37%であり、秋入学以降も増加し続けている。ほとんどが来日間もない生徒で、初期日本語指導について様々な課題が生じた。また母語を話せる教職員がいない中で、どのように日々の学習をサポートできるか、さらに研究を進める1年となった。

(1) 校内研修について

研修担当が中心となり、毎月定例の校内研修を計画し、実施することが

できた。まず4月に各教科担当が年間計画を出し、その後それぞれの教科における進捗状況の共有と、生徒の具体的な様子の共有をおこなった。お互いが日ごろ課題に感じていることを出し合い、課題解決の糸口を探った。

日本語指導について、今年度は専門的な知識を持つ教職員がいないため、来日したばかりの生徒に対する抽出授業の在り方について意見交流を行った。その結果、本校独自のひらがな・カタカナの教材を作成する必要があるという結論に至った。来年度が始まるまでに作成の予定である。

(2) 生徒が自分の思いを伝えられるような授業づくり

継続して出席することが難しい生徒もいるため、これまでは1回完結の授業となる場合が多かった。今年度は生徒が自分の思いを仲間に伝えることをテーマとした授業づくりに取り組んだ。まず自分が夜間中学校にたどりつく前のこと、そして現在の自分について語った。その後、自分たちがこれから夜間中学校で学ぶ生徒たちのために何ができるかを考え、学校紹介動画を作成することになった。どのような動画を作成するのか、自分の得意なことを活かして、役割を決め、現在制作しているところである。在日年数が長い生徒も多いクラスで行ったこともあり、日本語が母語でない生徒も自分の気持ちを伝えようと努力する姿が見られ、また仲間の思いを温かい気持ちで受け止めようとする姿が印象的であった。

(3) 全国夜間中学校研究大会等への参加

本年度は全国夜間中学校研究大会が東大阪で開催された。東大阪の夜間中学校の歴史を学びなおし、全国から訪れた関係者に布施夜間の生徒とともに過去、現在、未来の自分たちを表現することができた。大きな舞台上で発表できたことは生徒たちの大きな自信につながった。

(4) 進路保障について

10代で来日した生徒の多くは日本で生活者として将来を考えており、隣接する大阪府立布施北高校への進学を希望している。

毎日授業が始まる前に補習授業を行い、入学試験のための学習やその後の高校生活を安心して送ることができるように集中して学習を続けてきた。母国での学習背景がそれぞれ異なり、個別対応しなければならない場面もかなり多かった。これからもこのような生徒が多く訪れることが予想されるため、在留資格を含め専門的な知識を持つ講師に来ていただき、外国籍の生徒の進路保障について研究を進める必要がある。

(5) 中学校区および地域とのつながり

昨年度から意岐部中学校区の全教職員が集い、個別人権課題や進路保障などについて研修を行う場に、本学級の教職員も参加している。年度の初

めには夜間中学校の果たす役割について紹介した。また本学級のオープンスクールや公開授業に参加してもらうことで夜間中学生の存在をより深く中学校区の教職員に伝えることができた。また祭りや餅つきなど、地域の方々にも参加していただいて交流することで、夜間中学生の学ぶ姿を身近に感じてもらうことができた。

(6) ICT を活用した生徒の学習活動の支援の在り方

外国籍の生徒が多いのでタブレットを使って学習支援を行うことができた。タブレットを机上に立て、google翻訳を使って授業の内容を翻訳した。また受験を控えた生徒は学習ソフトを使ってドリル学習を行った。

【布施中学校】

①中学校教育を実施するに必要な、高齢者向けの教育課程の在り方

高齢の生徒の多くが在籍するクラスで個別最適な学びと協働的な学びの推進を柱に研究を進めてきた。日常的に全体の授業の中でも一人ひとりの発言が尊重されており、小グループでの活動は多くなかった。今年度はICT機器を適度に活用しながら、小グループで同じ作業に取り組んだり、意見交換をしたりという取り組みを継続的に進めた。年度末の一年間の振り返りアンケート調査項目の「ほかの生徒の考えがわかるようになりましたか」の質問では、高齢（60歳以上）の生徒の87.5%が肯定的な回答（前年度69.2%）をした。小グループの意見交換の中から、生活上の困り感を教員も含めて共有され、生徒理解にもつながった。具体的には、ある生徒の仕事でPCを使わなければならなくなり、文字の入力ができなくて困っているというお話から、タイピングの練習や、ローマ字の学習につながった。目的意識をもった取り組みになったためか、「授業でタブレットを使うと学びやすいと思いますか」の質問には高齢の生徒の75%が肯定的な意見（前年度63.7%）であった。また、昼の中学生との小グループでの交流や、年代や国籍の違う生徒との交流では、高齢の生徒が身を乗り出すように聴く姿勢があり、積極的な発言も多々あった。質問項目「ほかの国の言葉や文化を大切だと思いますか」の肯定的な回答は100%（前年度92.3%）であった。夜間学級では全体での授業では数人の発言が目立ち、その発言から学びが深まることがよくあるが、多くの生徒が「お客さん」になってしまう。小グループの活動では、「お客さん」が減り、より主体的な学びにつながったのではないかと考えられる。

今年度も一年間の学習のまとめとして、文集「おとなの中学生」の作成に取り組んだ。学校での授業や行事、地域の小中学生との交流などから得た学びや、自分の生い立ちから夜間学級で学ぶに至る気持ちなどを綴るこ

<p>とができた。また今年度は全国夜間中学校研究大会が東大阪市で開催され、大きなホールの舞台上で全国の仲間に向けて学びの様子の報告や作文の発表、「東大阪市からの発信」を行い、かけがえのない経験をすることができた。大きな達成感を得た生徒が多く、それを自分の言葉で綴ることで、自分の想いの伝え方について深く学ぶことができた。</p>
--